みづからにかはりて僧昌首座、これも詩にて心ばへあはれに、旅のこゝろばへうつしやりぬ、見わたす景色、そのかみみしにもはるかにまさりたり、

藻鹽やく煙もたえてたび人の袖ふきかへす沖つうら風

〔宗長手記〕中御門殿御在國折ふし、興津しほゆ湯治、旅宿へ文にあそばしそへて、

さむき夜はむかふうちにも埋火のをきつのことぞ思ひやらるゝ

御かへし

曉はいけるばかりのおきゐつゝおもふことゝは老のさむけき

〔扶桑拾葉集三十〕關東海道記　源通村

伊豆國妻郎津

おきつをすぐるとて

見ても猶あかず過ゆく名殘をぞおもひおきつの跡のしら波

〔吾妻鏡四〕元暦二年〇文治元年三月十二日乙未、爲征罰平氏、兵船三十二艘、日來浮于伊豆國鯉名奥、幷妻郎津、被納兵粮米、

武藏國埼玉津

〔夫木和歌抄二十六津〕さきたまのつ　武藏

〔萬葉集十四〕東歌

佐吉多萬能津爾乎流布禰乃可是乎伊多美都奈波多由登毛許登奈多延曾禰、

〔萬葉集略解十四上〕埼玉郡は海によらず、利禰の大川の船津をいふなるべし、

下總國大井津

〔將門記〕新皇〇平將門中略、成可建王城議、其記文云、王城可建下總國之亭南、兼以樣橋、號爲京山埼、以相馬郡大井津、號爲京大津、

〔相馬日記一〕豐田郡水海道の里の、鈴木頂行が家につきしは、たそがれ時ばかりなり、〇中略そもそも水海道といふは、むかし平將門が、相馬の僞内裏つくりしをり、相馬郡大井の津をもて、京の大